

鴻 koh

月刊俳句誌

令和元年9月1日発行

(毎月1回1日発行)

第14巻第9号 通巻159号

9 月号

2019



枳殻の散るとき雨の強くなる

四阿に座し六月の雨を聴く

沖繩の日なり夾竹桃の白

蒲の穂の百が百羽の鳥となる

大でまり小でまり紙を漉く里に

ざぶざぶと梅雨ふかふかと寺の黙

ほうたるを見て来し夜の人嫌ひ

縁に座す僧と半刻梅雨の隙

母よ妻よ鵲の橋渡り来よ

頬杖を解く夕虹の立ちたれば

梅雨なかばなり盆栽の百の棚

一陣の風蜘蛛の子をちりぢりに

鴻司ふと四万六千日の雨

鵲の橋

主宰作品

増成栗人

鴻 作品抄

まんまるく里山の暮れ桑は実に

北村 操

妻籠本陣青梅のころころと

荒井 一代

ゆふさりの一羽か二羽か夏の鴨

岩崎 俊

くちなはを唾へし鳶が山へ向く

坂入喜代枝

立葵家にはいつも母がゐて

佐藤あさ子

気の抜けしビールの泡のやうな夏

水沢和世

水底を見たくはないかあめんぼう

藤原明美

太宰忌を牡鹿半島の海霧の中

西條弘子

河骨の花を静かに濡らす雨

伊藤 隆

風鈴の音がいちにちの寧らぎに

和田 遊

雲は詩を滝は光を描きけり

吉清和代

新緑の古都へ三日の行脚かな

中内敏夫

折紙の折目合はせて梅雨の隙

三代川朋子

追分の祠がひとつつ百合の白

森 祐司

蚊帳吊草振つて軽さを確かめる

守屋久江

竹皮を脱ぐとき空の深くなる

倉林はるこ

黒揚羽生る氷河期の森の跡

石垣真理子

多佳子忌の夕べは沙羅の散る夕べ

横尾かな

雨しとどなり芍薬の八重一重

立石まどか

振花の思考回路のやうにかな

中川幸恵

山彦集

増成栗人 選



船橋 北村 操

筒鳥や正岡子規の句碑に雨
まんまるく里山の暮れ桑は実
梅漬ける山の水音が風の音
額咲いて母が手を振るやうな風
夕焼け空なり法華寺の避雷針
村の風村のかたちに燕の子

豊橋 荒井一代

栗の花恵那の山並烟らせて
本陣の捨て大釜に驟雨くる
鴨足草ひねもす瀬音雨の音
妻籠本陣青梅のころころと
寒山拾得定家葛の花匂ふ
城山の落し文なり狐雨

牛久 岩崎 俊

ゆふ空のささなみのごと河鹿鳴く
水の闇あり黄菖蒲の咲くほとり
ゆふさりの一羽か二羽か夏の鴨
青岬ひとときを鳥眠りぬる
神域の一本の揺れ祭笛
是非もなく薬を増やし梅雨に入る

松戸 森 祐司

木曾の山木曾の五木よ岩魚焼く
追分の祠がひとつ百合の白
嫗二人木地師の里の梅雨人かな
花あやめ檜の笠を薦めらる
汗かいて山城跡に残る井戸
河骨の渾身の黄が城濠に

仙台 佐藤あさ子

折紙の折目合はせて梅雨の隙
母恋へば切れ切れに鳴く青葉木菟
麦の秋瓶にぎつしりコルク栓
蛇衣を脱ぐ電柱に避難地図
帆船の絵はがき届く大西日
遺句集を閉つ葭切の鳴き止まず

大阪 林 未生

ふたたびの妻籠よふたたびの夏よ
蒲の穂や信濃は色を深めたる
濃く淡く日の差す宿場遠郭公
えこの花木會路の空の移り気に
良きことのあるらし落し文ひとつ
日に風に耐へし石垣梅雨に入る

松戸 良知悦郎

遠葭原葭切のこ糸染むほどに
さくらんぼ古代遺跡の丘陵に
熊おどす爆竹篠の子の山に
崩るるも牡丹のかたち山の晴
新緑の堰を越えたる山の音
日照雨来る鷺は青田になりきつて

せがまれて茅の輪なんどもくぐりけり

後藤兼志
山崎正子

「せがまれて」に氏の存在感の大きさが嬉々と表現され、平明な一語一語に深い愛情を感じます。みなづき祓の「茅の輪」は、三回くぐって身を祓い清めるとあります。

私の近くにある祭神は、知恵と学業の神で、御神体の巨石が断崖に釣り上げられたように見えるところから「釣石神社」と呼ばれています。東日本大震災で、神社も社務所も、鳥居も周辺の部落も、すべてさらわれたのに、マグニチュード九の地震にも巨石はビグともせず「落ちそうで落ちない受験の神様」として知られるようになりました。「ヨシ合格」から横四・五メートル「みんな合格」から高さ三・七五メートルとし、氏子と石巻専修大の野球部四十名の協力で、北上川特産の葦で作った大きな「茅の輪」が十二月の吉日に設置されます。

茅
— 特集 —

茅の一句

「茅」を詠んだ自分の俳句、または「茅」が詠まれた愛誦の句と、その句についてのエピソードや、俳句のかでの「茅」について語っていただきました。

「茅の輪なんどもくぐりけり」には満足感と共に祓われた清々しさが伝わってきました。

やすらかに人とほしたる茅の輪かな

長谷川 權
美濃律子

六月晦日に行われる夏越の大祓、その神事の一つが茅の輪くぐりです。厄払けの力を持つとされる茅葺で作られた大きな輪が、鳥居や拝殿などに設えられます。

参詣の人々は、身の穢れを祓い無病患災を願いながら、左右左と三回くぐります。ペットの犬も腕に抱かれて、いっしょに輪をくぐっている様子がテレビニュースに写し出されたりします。清らかな神域に集う善男善女。掲句の「やすらかに」「人とほしたる」の言葉が、すんと心に落ち着きます。

私も子どもの頃、近くの神社に母や妹と茅の輪くぐりに行きました。私が育った地方では茅の輪くぐりを「輪くぐりさん」と言っていました。茅の輪の香りが懐かしいです。

故郷に輪くぐりさんと呼びをりし
茅の輪くぐればふと母の声 律子

藤原京址なり茅花流しなり

増成栗人
松田那羅生

俳句仲間と深吉野へ年に最低四回程度吟行する。コースは幾

に溢れたお人柄であったようにお見受けする。

氏は幾多の経験の中から淡々と生きる心情に徹して歩んでこられたのであろう。来し方を振り返った時「淡々と生きて」と言い切れるその生き方に心を打たれる。

掲句のように淡々と生きることが出来たらよいのだが容易なことではない。そうありたいと思うばかりでまるで異なる生き方しか出来ない私としては、心はずしりと重いものが残る句である。

せがまれて茅の輪なんどもくぐりけり

後藤兼志
平野鉄哉

茅の輪は六月三十日に神社での夏越の祓の行事のひとつで、茅や藁を紙で包み束ねて大きな輪の形に作ったものです。この茅の輪を三回くぐって身を祓い清めます。茅の輪をくぐるには決まりがあり、どの様にしてくぐるのかを書いた看板を立ててある所もあります。その看板に書かれている決まりにしたがって茅の輪をくぐります。

この句は、作者がお子さんと神社を訪れて共に茅の輪をくぐられた時の句と思います。お子さんが茅の輪をくぐることに楽しさを覚えて、何回となく茅の輪をくぐるのをせがまれたようです。

後藤兼志全句集『遊』より。平成七年作

通りかあり、必ず立ち寄る場所の一つに藤原京がある。師の句、残念ながら一緒に頂いたかは覚えていない。藤原京は天武天皇のあと、六九〇年に持統天皇が即位し、六九四年に藤原京に都を移した。ここは畝傍山、耳成山、香久山に囲まれた平野で、唐の都の制度を模した人為的計画的に造られた、日本最初の人工都市である。四季折々、大和三山回遊を折り込めば一日中いても飽きない、お勧めである。

松葉杖外して茅の輪くぐりけり 赤峰ひろし

水の神である。丹生川上神社の社では茅の輪があり、赤峰支部長は松葉杖を外すと言う短い言葉の中に強い意志と吟行句はこうだとを示し、茅の輪くぐりの作法も優しく指導されたのを思い出した。

主宰や赤峰支部長が元気で指導されている今を感謝している。

淡々と生きて跨ぎし茅の輪かな

能村登四郎
石田蓉子

作者の人となりについて私はほとんど知らないのだが、氏は一九一一年に生まれ応召も経験、敗戦の時は海軍水兵だったという。

その後相次いで長男次男を亡くされるという不幸に見舞われたそうである。

七十年に「沖」を創刊、決して平穩に過ぎた年月ではないと思われるが他の俳句を拝見すると、その作風は穏やかで優しさ

◆茅の輪くぐり

中川幸恵

私の生まれ育った地域の祭。久しぶりに子ども達と行く茅の輪があつた。その時は「茅の輪」もその「意味」も知らず、説明通りに子ども達の手を引き茅の輪くぐりをした。今思えば本当におバカな私。「これで頭が良くなるよ」と子ども達に言い祭りを楽しんだ。しばらく過ぎて茅の輪のこともすっかり頭から離れた頃、娘が答案用紙を手渡してきた。

シヨート
エッセイ

茅・アラカルト

◆ひとり旅

幡 柏

七夕の季節になるといつも思い出します。二十代からの願ひ事で白川郷へのひとり旅でした。子供が社会人になってやっと思い出がい、白川郷のガイドブック手に三泊四日のひとり旅をしました。民宿のご主人がビデオで村の歴史や、生活の様子など紹介して下さい、民宿のご主人と村の方と二人で茅葺き屋根の修理をしているところに出合い、この光景は二度と見られないと思い写真を撮らせ

てもらったり。その時、「送らないで写真持たせてまた来てくれエ」その言葉が私から離れませんでした。迷いつつ写真を保管して二年程経った頃チャンスがありました。「河」の全国大会が岐阜高山で開催され、吟行地が白川郷でしたのでその時に約束を果たせました。

◆茅葺の四阿

小澤 冗

過日、句友から明治神宮御苑の花菖蒲鑑賞の招待券を頂いたので、梅雨の合間を縫って参拝をかねて見学に赴いた。都会のど真ん中であるにも拘わらず、苑内の深閑鬱蒼とした木立の佇まいはまさしく別天地であった。鶯の声や木々のそよぎに身を任せて案内に従って進むと開けた菖蒲田に出た。紫や白など色とりどりの花菖蒲を堪能することができた。

特に苑内の少し高みにある、茅葺の四阿からの眺めが一入素晴らしく、明治天皇、昭憲皇太后のお好みの場所でもあったとのことである。池に流れ込む水を遡ると、清正の井があり、今も滾々と清水が湧き出ており掌を浸すと冷たく心地良かった。都会の喧噪の毎日と忘れる大満足の一日を過ごすことが出来た。

茅葺の四阿に座し涼しかり 冗

◆茅

岩佐 梢

数年前、愛知県瀬戸市を訪れた時、黒つば

九十点「よし」と頭をなで裏を見た瞬間目を疑った。○点?何度見ても○点。ドラえもんで見かけたことのない点数。一瞬、茅の輪くぐりを思い出した。無病患災、厄難消除…。調べたが学力向上という文字はなかった。自分の愚かさ舌を出す娘の姿に二人で笑うしかなかった。「娘よ。母の器は大きいぞ」笑

羽音集

選 栗人 成増



水底を見たくはないかあめんぼう 船橋 藤原 明美
蝸牛角と言へどもやはらかき
やはらかな麦生の里の水の音
身丈ほどの菩薩の坐像五月闇
かつたむり夕べの風の吹くままに
梅雨の来て弱火で焼ける玉子焼 仙台 立石まどか
時鳥のこゑ薄縁を敷く家に
人住まぬ旧師の家の合歓の花
雨しとどなり芍薬の八重一重
夏至の日をゆつくり昇るエレベーター
十二橋の一橋にゐる雨蛙 流山 中内 敏夫
佇みて青田の調べ聴きぬたり
遮断機を抜けて大きな黒揚羽
かたつむり雨来るまでの葉の裏に
新緑の古都へ三日の行脚かな
薔薇赤し身ほとりにもう宵が来て
薔薇剪定静かな庭に戻りけり
雨上がり太宰忌の月山頂に
白蝶の舞ひ白菖蒲揺れにけり
黄昏の色となりたる濃紫陽花

山岸 明子

楽庵閑話

虫丸



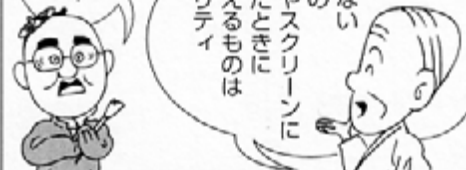
オッ その姿はどうしたんだい



ダリ展を見てきたんです
ありえない世界を描いているのに
その中の一つ一つは
すごくリアルな描写で
ビックリしました

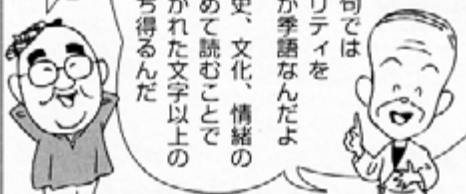
ダリの絵に限らず
空想の中でしか存在しない
世界を現実のキャンバスやスクリーンに表そうとしたときには
真実味を支えるものは
細部のリアリティ
なんだよ

細部のリアリティですか…



これが短くて説明が無理な俳句では
そのリアリティを支えるのが季語なんだよ
季語の歴史、文化、情緒の背景も含めて読むことで
俳句は書かれた文字以上の内容を持ち得るんだ

なるほどー



それでフィギュアは顔は少女漫画チックでも装具の細部やスタイルのリアリティにこだわらるんですね

知ってますか？
綾波レイはクロインだから
三人いるんですよ！

